

知求会ニュース

2007年12月

第24号

◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

大嶋久美子(国際交流研究専攻・1期生)さん、李 文玲(国際交流研究専攻・2期生)さん(当日欠席)、王都一楽(国際文化研究専攻・7期生)さんの3名が、9月28日(金)の午前10時30分から大学本部3階第一会議室にて菅野学長から学位授与の手渡しが行われました。

◎ 博士後期課程、進学おめでとうございます！

武田祐也(国際社会研究専攻・3期生)さんが、2007年4月から早稲田大学大学院 政治学 研究科 公共政策研究領域・自治行政研究専攻に進学されました。ここに、進学情報の確認が遅れたことをお詫びいたします。

◎ 教職員人事異動

菊池浩行 総務主任

国際学部総務主任の菊池さんが9月1日付で学生支援課に異動されました。国際学部には平成18年4月から在籍され、短い間でしたが多くの方が菊池さんにお世話になったことと思います。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。後任には、事務本部から岩城北斗さんが着任されました。

◎ 9月入試合格結果

国際社会研究専攻	一般	2名	・ 社会人	3名	・ 外国人	2名	計	7名
国際文化研究専攻	一般	2名	・ 社会人	2名	・ 外国人	2名	計	6名
国際交流研究専攻	一般	2名	・ 社会人	0名	・ 外国人	1名		
	国際交流・国際貢献活動経験者	1名	計	4名	合計	17名		

◎ 国際学部附属多文化公共圏センター設立準備室の開設について

国際学部において、地域の国際交流・協力をより一層活発化させることを目的として、12月1日に多文化公共圏センター設立準備室が開設されました。

多文化公共圏センターは、県内外の自治体、教育委員会、国際交流協会、国際交流に携わる市民団体等(NPO、NGOを含む)、国内外の国際交流・協力機関、宇都宮大学及び国際学部と交流協定を結んでいる海外大学と交流ネットワークを形成することにより、国際交流・協力に関わる実践的課題を解決するための情報を交換し合い、共同で研究して課題を解決する組織です。同センター設立における今後の展開が期待されます。

◎ シンポジウム 栃木県における外国人児童生徒の教育の明日を考える 2007 開催

重点推進研究シンポジウム報告

根本久美子

12月1日の土曜日、午後1時から6時までの5時間にわたり、宇都宮大学峰キャンパスにおいて、宇都宮大学平成19年度重点推進研究のシンポジウム『栃木県における外国人児童生徒の教育の明日を考える2007』が開催されました。第3回目になる今回のシンポジウムは、前半が日本大学文理学部教育学科の広田照幸教授と群馬大学教育学部学校教育臨床総合センターの結城恵准教授のお二人による講演、そして後半が栃木県内外で外国人児童生徒の教育に携わっている5人の現場の先生方による事例発表と2人の討論者を加えたパネルディスカッションというように、2部構成で行なわれました。

まず、最初に、広田教授が、『グローバル化時代における日本の教育』という演題のもと、歴史的見地に立たれて、未来に向けた教育について講演を行ない、現在、10歳の子どもが人生を振り返る頃、即ち70年後を想定し、長いスパンで日本の教育をどうするかということを考えなければならない必要性を説かれました。「グローバル化する社会とは、資本・雇用・情報が移動し、国、地域の相互依存が強まり多次元多層化された社会である。それ故、これからの日本の教育において、『われわれの社会』の「われわれ」についてどういう単位で教えていくのかということが問われ、これまでの国家国民という枠組みではない意味変化に対応した教育が求められる」と述べられました。外国人児童生徒教育をマイノリティとして日本社会への適用のために行なうのではなく、来るべき社会へ向け、異質性・多様性を活用できる人材育成という観点で行なうべきだという広田教授の指摘は、栃木県における外国人児童生徒の教育を研究している私たちに大きなヒントを投げかけたといえるでしょう。そしてそれは、また、増え続ける外国人労働者とその子女に対するこれからの日本の教育の方向性を指し示していたとも言えます。

次の結城准教授の講演は、平成10年度から開始された群馬大学の『多文化共生教育・研究プロジェクト』の取り組みを、パワーポイントを使用しながら行なわれ、とても分かり易く、今後の栃木県の取り組みに向けて大変参考となるものでした。結城准教授は、群馬県と群馬大学の協働による多文化共生という地域課題に挑戦してきた事例の発表を通して、「多文化共生マインド」を備えた教育・医療・法律など様々な分野の専門家の必要性を強調しました。講演において、結城准教授ご自身と群馬大学の全学部の専門家間の連携でこれまで進められてきた様々な取り組みの紹介がありましたが、その中で、多言語による病院受付のタッチパネル式システムの開発と群馬大学付属病院へのパネル設置はこれまでの取り組みの成功事例の最たるものではないかと思います。外国人のために設置されたシステム装置が、日本人の聴覚障害者にも非常に役立っているという話は、「多文化共生マインド」は、外国人のためだけに必要なだけでなく、様々な背景を持つ日本人をも含んだその地域に住むみんなのために必要なことだということを示唆していると感じました。

さて、後半のパネルディスカッションですが、現場で外国人児童生徒の教育に携わっている先生方によって、多岐に渡った事例が紹介されました。今回、県内からは大田原市立西原小学校と小山市立小山城南中学校の先生が、そして県外からは東京都立小山台高等学校定時制課程と静岡県立浜松養護学校中学部の先生がパネラーとして参加され、それぞれの現場の現状と課題を発表しました。その後、小山市立小山第三中学校の若林教諭と本学の教育学部の丸山准教授が加わりディスカッションが行なわれました。このディスカッションにおいて、外国人生徒の中学から高校へかけての進学率の大幅な低下という大きな問題がクローズアップされました。今の公的教育は日本国民の子どもを対象としているため、外国人の児童生徒の教育はどうしても対処的なものとなっており、その状況において現場の先生方がいかに日々奮闘しているかが、会場の参加者へとひしひしと伝わってきました。

定住化が予想される外国人労働者の子女は、未来の日本社会を担うであろう人材といえます。彼らに対する教育を考えることは、私たちの未来の社会を考えることです。私たちは、今回のシンポジウムで浮き彫りになった課題に真摯に向き合い、多様性や異質性を肯定的に受け入れる社会のための教育を考えていく必要性を痛切に感じました。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第4期在学学生)

* 『HANDS—とちぎ多文化共生教育通信』の発刊のお知らせ

2007年9月20日に、宇都宮大学特定重点推進研究「外国籍の子どもたちの教育・生活環境をめぐる問題」研究グループによるニュースレター『HANDS』第1号が発行されました。研究者代表の田巻松雄先生の「『HANDS—とちぎ多文化共生教育通信』の発刊にあたって」、共同研究者の教育学部・丸山剛史先生の「ニュースレター発刊の意図」、さくら市立喜連川中学校・齊藤美知代先生の「日本語指導教室（ワールドルーム）を担当しての7年間」、小山市立小山第三中学校・若林秀樹先生の「日本語教室」という仕事」、学生 PICK UP vol.1 として、調査報告・県外の事例 バイリンガル教育「パウロ・フレイレ地域学校」を国際学部4年の矢部昭仁さんが執筆しています。問い合わせは、事務局の田巻松雄研究室 (tamakimm@cc.utsunomiya-u.ac.jp) へお願いします。

◎ 国際学研究科 特別講演会開催

2007年11月14日(水)午後2時より4時まで、共通教育棟B棟1223教室にて、ドイツ連邦共和国公使のベルント・フィッシャー氏による、“The Future of the relationships between Germany, Europe and Japan.”の特別講演会が開催されました。

◎ 掲載記事紹介

1. 宇都宮大学留学生センター・ニュース第10号(2007年3月発行)に、「留学生の声」の欄に今春修了されたイルマ・フローレス・フローレスさんの「私の経験」が掲載されました。

2. 宇都宮大学新聞第 170 号(2007 年 4 月 23 日発行)2 面に、**スエヨシ・アナ**先生の「Bienvenidos* ようこそ」が掲載されました。

3. 放送大学栃木学習センター「とちの実」第 58 号(平成 19 年 10 月発行)に客員教員として、**柏瀬省五**先生が「英語は国際社会で活躍するためのパスポート」と題する巻頭文が掲載されました。

4. 宇都宮大学「UU now」第 11 号(平成 19 年 11 月 20 日発行)の 8 面、「研究 keyword」に**佐々木一隆**先生による「言語普遍性・意味と形式・英語教育や日本語教育への応用」と題する寄稿文が掲載されました。

◎ 国際学部だより

訃報

西村暢子さん(国際学部第 1 期生・友松研究室)

西村さんによる今後の海外での活躍が期待されていただけに、惜しい人財を失いました。大学院同窓会から、慎んでここにご冥福をお祈りいたします。なお、時事通信の詳細記事は以下の通りです。

海外

JICA 職員ら 2 人が交通事故死＝チュニジア

10 月 1 日 22 時 0 分配信 時事通信

【カイロ 1 日時事】チュニジア南部で 9 月 30 日午後(日本時間同日夜)、観光旅行中の国際協力機構(JICA)職員ら日本人 2 人が交通事故に遭い、死亡した。在チュニス日本大使館と JICA が 1 日、明らかにした。亡くなったのは JICA 北京事務所職員の**西村暢子さん(31)**＝鳥取県出身＝と、チュニス事務所のシニア海外ボランティアの**田村和悟さん(65)**＝山口県出身＝。2 人は塩湖観光のため、南部の町トズールからケビリに向け 4 輪駆動車で移動中、タイヤが破裂して車が横転したという。チュニジア人の運転手も負傷した。

(<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20071001-00000194-jij-int>)

研究室訪問 15 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 15 回目には、地球社会形成研究講座所属の**倪 永茂**先生にお願いしました。

「IT とその周辺」

倪 永茂

宇大に来て速くも16年経とうとしている。いや、大学時代も宇大だったので、そこから数えたら恐ろしい年数になってしまう。国際学部の前身、教養部の電算機教育を担当して以来、コンピュータやそのネットワーク関連の教育研究に携わってきた。

IT (=Information Technology、情報技術) は時間や空間を超え、年齢や性別、国籍を問わず、誰もが自由にコミュニケーションすることを可能にしてくれた。

XO という名前をご存知? それは非営利団体 One Laptop per Child (OLPC) Foundation が発展途上国の子供向けにつくられたノート PC のことだ。子供達は教科書がなくても、先生が身近にいらなくても、XO を持っていれば、インターネット通し、冒険・自己表現・学習ができ、世界の人々に教えてもらえる。こんな壮大な実験が IT 社会で行われようとしている。100 ドル PC と言って、XO は価格を 100 米ドルにするのが最終目標のようだが、発電装置や CCD カメラが内蔵されているところがユニーク。新しい教育手段の提供、しいては飢餓・貧困の撲滅に貢献することが OLPC プロジェクトの理念だ。しかし、貧しい子供たちの手に XO が渡っていくのか、子供たちに受け入れてもらえるのか、そして教育効果が得られるのか、すべては未知数のままだ。

このように、技術的側面と社会的側面、研究室では2つの立場で IT に関する研究を行っている。

研究のテーマには、例えば情報セキュリティに関するものがある。情報セキュリティとは、情報の機密性、完全性、有用性を安心・安全に享受することだが、IT の普及によってその重要性が益々増えていくと思われる。

今日のノイマン型コンピュータは理論上、バグ (不具合) のないソフトをつくるのは不可能だと証明されている。安心できて、バグの少ないソフトがあったとしても、開発会社の収益追求や、ユーザ側の要望によって、多機能化・大規模化に変わっていく。例えばメーラー。Eメールを見るソフトなので、本来ならば安心して使えるメーラーは難なくつくれるはずだ。プレーンテキストメールを読書きするだけのフリーメーラーはいまでも安心して愛用するユーザが多い。しかし、HTML メールもきれいに見たい、写真も表示してほしい、機能が増えるほど、危険度が増し、信頼性が低下していく。バグを直す修正プログラムがつぎからつぎへと配布されていくのが現実だ。

ソフトのバグが突き込まれてコンピュータウィルスから被害を受けるだけでなく、想定もしなかった使い方によってコンピュータが危険にさらされた面もある。コンピュータに保存している情報を勝手に外部送信するスパイウェアは大部分のパソコンに潜んでいることが報告されている。また、多くの無償ソフトがユーザから情報を集め、ターゲット広告を効果的に送りつけようとしている。最悪の場合、コンピュータがボットネットに組み込まれ、知らぬ間にどこかのサイトを攻撃するようになり、大きな社会問題を引き起こす恐れに発展してしまう。

IT と社会との関わりについても多くの研究を行っている。最近の例では、遠隔看護における IT の利用や、オンラインゲーム内で使用されている仮想通貨が実経済に対する影響な

どがある。

具体的に書くと、オンラインゲームでは、サービスの利用やアイテムの購入に電子通貨（電子マネー）が用いられている。しかし、セカンドライフなどに代表されるような新しいシミュレーション世界では、電子通貨をわれわれがふだん使う実貨幣と換金できるようになった。ユーザが仮想土地を転売したり、アイテムに付加価値をつけたりすると、所有する電子的資産が大きく膨らむ。それを現物での資産と等価的に見るときに、課税の問題やマネーローダリングとの繋がり、法律や国のあり方など、多くの課題が浮かび上がってくる。

法律の枠組があって、それを踏み出さないように会社が事業を展開してきた。例えばテレビ番組をネットで中継することは日本の法律では基本的に禁止されている。しかし、国境を越えた海外からのテレビ番組がネット上で自由に鑑賞できるようになったいま、法律の合理性や実効性が著しく問われ、日本でも法改正の議論が行われている。しかし、ITの進展に合わせた形で法律を変え、すなわち、ITを追っかける形の法改正のあり方もまた問われている。

また最近、中国の経済発展にITの果たす役割についても関心をもつようになっている。日本でもアウトソーシングがコスト削減の手法として会社に広く利用されている。つまり商品の生産過程を上流から下流へと分離し、それぞれをもっとも得意とする国や会社に委託することで生産性を高めていくが、ITによって情報伝達や流通のスピードが飛躍的に高まり、基幹部品をもたず、組み立てだけで最終商品が生産できるようになる。このようにして、中国が世界の工場に成り立ってきたわけだ。

ITの実用性や社会性に魅力を感じている学生がいれば、是非一緒に勉強や研究を行いたいと考えている。もっと世界に目を向けて、ITがもたらす社会の変化を注目していきたい。

博士録 02 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第2回目には博士号取得者・**キロワ イワノワ スベトラ**さんを予定していますが、第23号に引続き、まだ連絡が取れない状態です。どなたか連絡が取れる方は事務局までご一報下さい。

知究人 07 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー（**ちきゅうびと**）を設けました。第24号の第7回目は、寄稿予定者の都合により掲載を中止します。つきましては、皆様に寄稿者の情報提供をお願いします。

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2007年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。（原稿集めに苦労しています。）今回は、国際社会研究専攻第1期生・友松研究室 OG・小形 幸さんと国際社会研究専攻 第6期修了生・北島研究室 OG・高井孝美さんをお願いしました。

「仕事を通じて思うこと」

小形 幸

「今度、知求会ニュースに後輩向けに何か文章を書いて欲しいのですが・・・」との依頼を受けた時、正直戸惑いました。

確かに学生時代は中国へ1年間留学、国際協力機関でインターンシップを体験、母校の高校で教育実習を体験など、様々な角度から国際学とは何かを学び、大学でしか学べないことを幅広く学んできたと思います。しかし、現在は、これまで学んだことや体験したことと関わりがない、システムエンジニアとして働いています。その意味で、「この知求会ニュースを通じて、私が国際とつく学問を研究する後輩に対して何を伝えられるのだろうか？」と戸惑い、自問自答しました。

私の仕事をキーワードにするなら、インターネット関係の部署、情報セキュリティマネジメントの仕事、脆弱性検査の解析、システムの運用管理、お客様への提案活動、契約手続きなどです。非常に多岐に渡る仕事であり、一般の方がイメージするシステムエンジニアとは全く異なります。

こうした私の現状を通じて後輩に伝えられること。それは、どんな仕事であれ、自分と想像していた職場環境と異なっても、一生懸命前向きに取り組むことだと思います。

自身の就職活動を振り返れば、国際的な仕事との直接的な関わりを求めすぎ、結果として就職に焦点をあて、就職後のビジョンや自分の方向性に対して具体性を欠いていたというのは否めません。そして、院卒で全くコンピューターの知識もなく、いきなり理系的な仕事に就職して、多くの戸惑いや試練も多かったのも事実です。「なぜこの業界で働いているのか?」、「もっと自分の専門を活かした仕事をすべきではないか?」と悩んだ時期もあります。しかし、今にして思えば、これらは大切な過程だったと思います。

私はどんな仕事でも最初は初心者であり、必ずメリットとデメリットがあると思います。私の場合、職業柄どちらかと言えば長時間労働、休日出勤や時間外呼び出しあり、徹夜ありで、精神的に厳しい職場環境の方で、デメリットをあげればきりがありません。ただし、つらいことやきついことが、結果として自分を成長させる過程であったことを今になって自覚できます。結局、その環境や状況をどう捉えるかは自分の考え次第です。むしろ、その状況を受け入れ、自分の中でいかにメリットとして捉えるかが大切だと思います。

最近、どんな仕事でも根本的な仕組みや取組みは変わらないように思えるようになりました。つまり、常に新しい知識を取り入れながら、自分で考え、判断し、決断していくこと、自分の考えを提案していくこと。そして、問題点があれば、それに対して解決策を見出すために、自ら行動し、周囲と相談・調整し、歩み寄ることです。私が学生時代で学んだことで、直接現在の仕事に役立つことはありません。しかし、国際学を学ぶ学生特有の行動力、価値観の多様性を理解できる力、柔軟性や調整力は間接的に大いに役立っていると自負しています。

就職後、3年以内で辞める方が多いと聞きます。それは適切な選択の1つではあります

が、続けるというのも1つの選択肢であることも忘れないで欲しいと思います。自分のしたいことと直接関わりが薄くても、続けることで新しい分野への興味がでてくるのも事実です。

学生時代は「今」しかありません。色んな人と出会い、沢山の体験を通じて、沢山のことを吸収し、その「今」を思う存分楽しんで下さい。そして、その環境において自分ができうる最善を尽くすこと、自分ができうる行動をすることが大切です。そうした姿勢が自分への自信につながり、今後の自分につながると思います。これらは今の私のテーマでもあります。

以上が、仕事を通じて思う現時点の回答です。少し時間が経つと違った見方や回答ができるかも知れません。後輩にとって就職や仕事について考える一助となれば幸いです。

最後に、本稿を通じて、自身を振り返りきっかけを与えてくれた土屋さんに感謝申し上げます。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第1期修了生)

「大人になったら何になるのか」

——職業について——

高井孝美

2007年のカレンダーも本当に残り少なくなってしまいました。それにしても、今年の3月まで私が宇都宮大学国際学研究科の大学院生だったことは現実だったのか、と我ながら信じられない日々を送っております。去年の今頃は、修士論文の仕上げのプレッシャーに押しつぶされながら、一年でいちばん仕事が忙しい時期をどうやって乗り越えようかともがいておりました。仕事ができないのは修論のせい、修論が進まないのは仕事のせい、と極めて健康的な因果関係を口実に年の暮れを迎えていたのですが、正月明けの1週間の休みで論文の仕上げをとという背水の陣の計画が、正月早々、近親者の不幸続きで完全にボツになろうとは夢にも思いませんでした。これだから中高年の学生生活の一寸先は闇、もしかしたら明日はわが身なのだということを実感いたしました。

私の職業は村上龍の「13歳のハローワーク」という本にも載っていない料理屋の女将です。載っていないということは、これから将来に羽ばたいていく若い方達におススメはできない割の合わない絶滅危惧職なのかなあ、とも思われます。商家の嫁として20数年。やっとその意味がわかってきた頃、私は大学院の門をくぐりました。私の場合、夫と職業がセットになっていたため今日に至っているわけですが、話せば長いことながら（本当に長いのでカットします。個人的にお知りになりたい方は後ほどお問い合わせ下さいませ）、じつは、48歳ぐらいまで漠然と「大人になったら何になるのかなあ」と思っておりました。ある日、何かの拍子にうっかり口に出してしまったこの言葉を子供に聞かれ、「え、ママは大人じゃなかったの?」とあきれられ、ようやく目が覚めた次第です。

なぜ、半白（白寿の半分）も近いおばさんが大学院へ？と若い方は思われるかもしれませんが、最近では新聞記事などでも見かけますように、熟年になってから再び修士号・博士号に挑戦しようということは珍しくありません。少子高齢化時代に生き残りをかける大学側と、豊富な人生経験を研究に生かし新たなキャリアにしたいというシニア世代との思惑がマッチしたということだそうですが、私の場合はもっと単純な動機でした。

昔、文学部で美術史を専攻し、国際社会学とはあまり関係のない学生生活を送った私がこの年になって、仕事にも家庭にも差し支えるような状況で3年もかけて大学院に通ったのは、とにかく「知りたい」という一心からでした。何を知りたいのかというと、それは知識ではなく、名前でした。自分が今生きている社会の中で、自分がしていること、考えていることは客観的にどう呼ばれるものなのか、自分がめざす生き方のかたちはどう名づけられるのか、ということです。学問や研究とは程遠く、今流行の自分探しといわれればそれまでですが、職業人として、また人の親として自ら問いかける長い間の課題でした。

私は38歳の時に進行性の胃癌になりました。難しいことは忘れてしまいましたが、第3ステージとかで、手術はしたものの体力が回復しないので抗がん剤治療も出来ない状態。これはダメかもということで、お医者様も家族も「もう好きなことをしたら」ということになりました。子供の時から競争社会で育ち、また高校の時父親をなくし経済的な事情から苦学の末大学を出て、とにかく苦勞をすればいつかは幸せになれると思って常に頑張ってきた私は、正直言ってやっとなんてほっとしました。「なんだ。人生なんてけっこう簡単なんだ。こんなことなら頑張らなくても良かったんだ。」

不思議なことに、こう肩の荷が下りた途端元気になりまして、しかも創業200年の厳しい伝統の商家の嫁は、けっこう気ままな嫁になることができました。それから10年、市民活動などで行政とかかわり、国際化の遅れている旧・日光市で日光国際交流協会を立ち上げました。大学院生時代は睡眠時間3時間ぐらいで、ほかにも女将、学生、茶道教授、書道会、各審議会委員、母親、そしてかろうじて妻、などをこなしておりました。ということは、結局どれも中途半端だったのだろうと推測するに難くありません。しかし、「大人になったら何になるのか」決まらないということは、さすがにこの年になると、実際は無駄が多く情けないものなのです。大学院で学ぼうちに、そんな自己満足だけの自分にすっかり嫌気がさして、修了と同時に、何足ものわらじをすっかり脱ぎ捨ててしまいました。学問の世界は、自分だけの思い込みだけでなく、普遍的な真理を追究するところだったのです。

私は、今でも職業柄いろいろなお客様との出会いを通して多くのことを学んでいます。いちばん最近では、ノーベル賞も受賞した高名な米国の経済学者の方がお見えになるというので、彼の本を何冊か読んでお待ちしております。「私の理想は、世界のすべての人々の幸福のための公平な経済」とうのが彼の理論です。お会いしてみると、最高権力の中核で活躍されているとは思えないもの静かな方でしたが、彼は、この極東の田舎の料理屋の女将がグローバル経済を論じた自分の本を読んでいてくれたことに驚き感動し、青年のよ

うな真剣な眼差しで私に感想を求めてきました。

また、ご近所の文化財修復の技術者のおじいさんが、金箔を買うときは、精度や品質は同じでも安い機械伸ばしだけでなく、高価な手伸ばしの金箔を必ず注文するという話をしてくださいました。それは、文化財の保存というものは、素材そのものだけでなく、それを産み出す過程の技術までも伝承させるためだからだそうです。出来上りの見分けはつかなくても、こうして作るほうも使うほうもいつまでも変わらない本物を学ぶ心が大切なんだよ、と教えてくれました。

結局、「あざとさ」のない真摯な生き方は、学問の世界でも、職人の世界でも変わらないのではないのでしょうか。若い方が自分の将来について思い悩む時は、その答えが出るまで思い切り真剣に悩み続けてもよいのかもしれませんが。研究職に進む方も、ビジネスの世界に飛び込んでいく方も、何かにぶつかるたびに学ぶということに会うに違いありません。

2週間ほど前に、我が家の愛犬ラッキーが12歳3ヶ月の生涯を終えました。ゴールデン・レトリバーのオスでとても優しい賢い犬でした。かつて私が病気になり、いよいよになった時、幼かった子供たちが後々寂しくならないように飼い始めた犬です。よく庭で家族に隠れて、「ラッキー、どちらが長生きできるか競争しようね。」と抱き合っていて泣いていたことを思い出します。はからずも彼が先に逝ってあらためて驚いたのは、その存在の美しさです。彼が遺した物は首輪とステンレスのお皿だけでした。あんなにも家族に喜びと愛情を与えてくれたのに、何も求めず、所有せず、煩わせることは何一つ残さず、思い出の国へ旅立っていく姿に思わず感動してしまいました。もちろん犬である彼の自覚するところではありませんが、仏教徒の私としましては、その最終的には何もないという姿に憧れてやみません。

しかしながら、もし学ぶということ、研究するというに意味があるとしたら、それは私たちの体の中で毎日滅びていく細胞や、失われていく時間とは別なところで私たちをかたち作っている何かを自ら名づけながら、この大きな宇宙のどこかに記憶させておくことかもしれないなあ、とも期待します。そういう意味では、職業というものは重要な要素だと思います。

「大人になったら何になるのか」を、大人になれないままそろそろ卒業する私としましては、気の効いた言葉のひとつも言えなくて申し訳ありません。ただ、大学院に行ったことで、若い方達をご指導してくださる先生方が、論文指導やフィールドワークなどを通して、自分を知ること、社会を見つめなおすことを丁寧に教えてくださっていることがよくわかりました。あらためてこの場をお借りして御礼申し上げます。

このようなアカデミックな場を書くのはまことに恐縮です。土屋さんにお声をかけていただいたのは暑い夏でした。論文執筆の頃が遠いはるかな昔のことであったかのように、すっかり業界用語（学術的言い回し）を失念してしまいましたが、ここはひとつ変わった職業のOBということに免じてお許し下さい。

さて、日光の雪見障子の外はいつのまにか冬景色となりつつあります。皆様のご健勝を男体山のふもとかからお祈り申し上げます。2008年も良い年でありますように。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第6期修了生)

重要

◎ お知らせ

「みなくるねっと」の受信メールが本年9月から使用できない状態にあり、システム老朽化のため12月25日を持ってサービスの停止になりました。就きましては、このたび「Yahoo!グループ」に掲示板を移管しましたので、よろしくお願い致します。

メールアドレスは、従来のglobal@minakuru.netから chikyukai@yahoogroups.jpへ変更しましたので、お間違いのないようお願い致します。

重要

◎ お願い

「みなくるねっと」のサービス停止に伴い、global@minakuru.netの受信メールに提出していただいた修士論文要旨がダウンロードできなくなりました。「みなくるねっと」へ送信いただいた会員の方は、恐れ入りますが再度、chikyukai@yahoogroups.jpにあたる「Yahoo!グループ」の**知求会**に送信をお願い致します。また、まだ未提出の方も併せてお願い致します。

さて、知求会ニュースも、無事6年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、ありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。

これから、年末年始にかけさまざまな情報交換がなされる時期です。昨年に引き続きぜひ、先生方、同窓生におかれましては、教え子、同級生・先輩・後輩にこの「知求会ニュースを読んでいますか?」と声をかけて下さい。メールアドレス変更に伴い、配信率が減少しています。国際学部HPにアクセスしていただければ、バックナンバーの知求会ニュースを見ることができます。[\(http://www.afis.jp/\)](http://www.afis.jp/)そして、「Yahoo!グループ」の知求会事務局へアドレスの変更連絡をお願いします。

編集後記: 限られた時間でニュース発行、同窓生の皆様のご感想はいかがでしたか?ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。同窓会会員の皆様へのお願い：
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。chikyukai@yahoogroups.jp
